

男女平等意識の継承性：フェミニストの母から娘へ¹

青野篤子
(心理学科)

第二波フェミニズム以降、フェミニズムはしだいに変容をとげ、現代はポスト・フェミニズムの時代に入っている。また、様々な指標が、日本における男女平等の遅れを示している。祖母世代、母親世代、娘世代はどのように男女平等意識を継承していったのか、できなかったのか、またそれぞれの原因はどこにあるのか。こういった疑問から、本研究では、男女平等の生き方を実践しているフェミニストとその娘に注目して、母親の生き方が娘にどのような影響を与えたかを検討した。3組の母娘にインタビューを行い、それぞれの母娘の人生径路をTEM図に描き、娘の自立に対して促進的・抑制的に作用した要因を検討した。その結果、フェミニストの母親はフェミニズムを直接娘に教えるわけではなく、自身の生き方を通して人生の価値というものを教えていること、自身の選択を通して娘に人生における選択の意味を教えていることが明らかとなった。

【キーワード：男女平等意識、継承性、フェミニスト、母、娘】

日本において、男女平等は達成されつつあるのだろうか。1960年代から1970年代にかけての第二波フェミニズム以降、女性の社会進出や男女平等は少しずつ進んできている。しかし、1999年に男女共同参画社会基本法が制定され、あらゆる分野での男女平等が今世紀の最重要課題と言われながらも、各国と比較した場合のジェンダーギャップ指数は、104位(2014年)で、近年改善の傾向は見られない。この数値は、教育・健康・経済・政治の各分野における指標を総合したものであるが、日本ではとくに経済・政治の分野で女性の活躍が芳しくないことが低い数値の原因となっている。労働条件や育児環境が整備されないため、出産・育児で仕事をやめざるを得ない女性が多く、女性の年齢階級別労働力率はM字型を脱することができないでいる。鶏と卵の関係のごとく、「男は仕事・女は家庭」に賛成する若い女性の比率も近年上昇している。

これらのことから、男女平等意識の継承は容易でなかったことが推測される。1960年代後半から1970年代前半の第二波フェミニズムの洗礼を受けたフェミニストたちは今や祖母世代となり、娘たちが母親世代となっている。この間、フェミニズムも徐々に変質を遂げ、その革新性・運動性を失ってきた。図1に示したように、1970年代のフェミニズムはウィメンズ・リブ(women's liberation)とも呼ばれ、女性があらゆる呪縛から解放されるための運動に特徴づけられる。続く1980年代は「やわらかなフェミニズム」と呼ばれ、運動が影をひそめ、学問や思想として成熟していく。さらに1990年代にはフェミニズムへの反動(揺り戻し)が起こる。2000年代はポスト・フェミニズムと呼ばれ、フェミニズムが終焉を迎えたという説もあるが、新たな感性をもったフェミニスト第三世代が育ってきていると言える。

この第三世代は、およそ現在 30 歳代の女性たちだと言えるが、思想や主義にはさほど関心はないが、自らの経験に正直に生きる世代という意味では 1970 年代のリブに似た側面がある。すなわち、第二波フェミニズムを生きた母親世代と現在のポスト・フェミニスト世代には共通性があると考えられる（渋谷，2008）。このような、時代状況が女性たちの男女平等意識を形成する側面は、コーホート効果としてとらえることができる（Duncan, 2010; Zucker, A.N., & Stewart, A.J., 2007）。

第二波フェミニズムの思想は、「個人的なことは政治的である personal is political」という標語に代表されるように、私的なことがらは公的なことがらとつながっていることを主張した。そこで、個人の私的な経験は公的な場面で開示され、試されるものであった。しかし、1 人の女性がライフサイクルを経るなかで、娘時代には男女平等主義的な考え方をもっていたとしても、母親となり、娘かわいさから娘に苦労のない道（仕事をやめて家庭に入るなど）を勧めることもありえる。それは、個々の母親から娘へというレベルでの男女平等意識の継承が矛盾や葛藤を含んでいることを意味する。

文学の中で、または心理学の研究においても、母親と娘との関係は親密である半面（あるいはそれゆえ）アンビバレントな感情を生み出すとされてきた（コール・ズッカー・ダンカン，2004）。水田（1996）は、「娘から女への成長の過程には、母親がモデルとなるはずだったにもかかわらず、娘たちはどの母親にも自分が求めるモデルを見出すことができず、母親を否定し、母親の影響力や支配からのがれようとした」と述べている。また、母親たちが遭遇し闘ってきた性差別が今は見えにくく、仕事と家庭の両立に苦しんだ母親たちはロールモデルになりにくいという指摘もある（野村，1992）。さらに、家庭外では公人として建前で

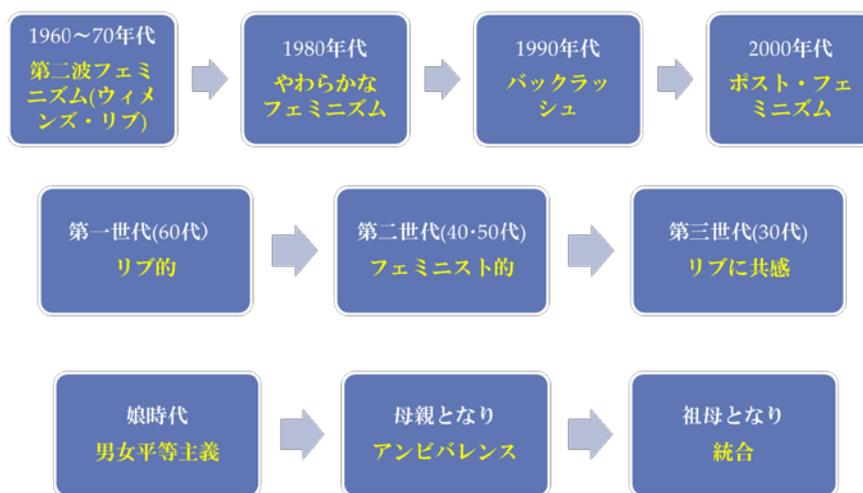


図1 フェミニズムの時代・世代・個人の各レベルにおける変遷

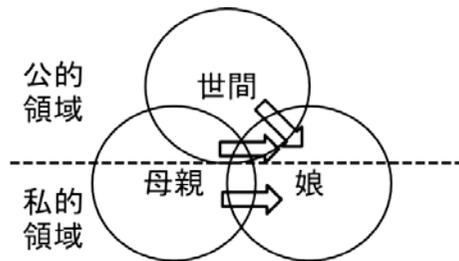


図2 男女平等意識の継承モデル

男女平等を唱えていても、家庭内では夫や子どもにかいがいい妻や母である場合もある。つまり、公と私との分離が存在する。青野（2015）は、公的領域と私的領域における母親世代から娘世代への男女平等意識の継承に関して図2のようなモデルを提唱している。この図からもわかるように、娘は母親から矛盾したメッセージを受け取り、また娘は、公的領域（そのマジョリティは世間と呼ばれる）から影響を受ける可能性がある。

このようなことから、母親から娘への男女平等意識の継承は一筋縄ではいかないと考えられる。青野（2015）が、女性学生たちの語りから、娘の人生設計に及ぼす母親の影響を複線径路等至性モデル（TEM）によって分析した結果、母親のキャリア・パターンや価値観・助言・養育態度などが複雑に絡み合っており、娘の自立に促進的・抑制的に影響を与えていることが見出された。また、青野（印刷中）は、専門的な職業をめざす女性学生に焦点を当て、両者の人生径路を1つのTEM図に表すことによって母親の影響を検討した結果、母親の働く姿が娘の自立を促す半面、共感的に寄り添う姿勢が、逆に就職の選択肢を狭めている可能性があることも示唆された。

本研究は、フェミニストの女性とその娘に注目する。フェミニストの定義は難しく、必ずしもフェミニストがフェミニストを自認しているわけではないが、子どもができて子育てに埋没することなく自分の仕事や活動を重視し、自己実現をめざしているという広義にとらえておく。3名の母親とその娘たちにインタビューを依頼し、母親が、娘時代から母親となり、そして今日に至るまでの人生径路と、その娘の人生径路を重ね合わせることで、男女平等意識がどのように継承されているのか、いないのかを検討する。また、男女平等意識の継承という点で、フェミニストの母親が娘に与える影響に何らかの普遍性がみられるかどうかを検討する。

方法

協力者

Aさん母娘:筆者の知り合いである近畿地方の大学の女性教員(52歳)とその娘(23歳)。
Bさん母娘:その人の紹介による、同じく近畿地方を拠点に外国で日本語教師をしている女性(55歳)とその娘(22歳)。
Cさん母娘:筆者の知人からの紹介で、北陸地方で牧場を経営し、女性のネットワークをめざすNPO法人の代表を務めた女性(66歳)とその娘(39歳)。

インタビュー実施時期・時間

2014年2月から10月にかけて母娘別々に1時間半程度の半構造化面接を行った。

インタビューの方法・内容

大まかな質問をして参加者に自由に話してもらい半構造化面接を行った。母親には、娘時代の経験と目標、仕事と家庭についての考え方、子育ての方針、娘に対する期待、男女平等・男女共同参画についての考え方、これからの人生設計、家族について、娘には、仕事と家庭についての考え方、母親をどう思うか、男女平等・男女共同参画についての考え方、父親を含む他の家族との関係について質問した。了解を得た上で、ボイスレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

TEM図の作成

逐語録をもとに、協力者の経験を時系列に並べてTEM図を作成した。具体的には、母親から語られた内容をもとに、仕事と家庭への比重の配分に焦点を当て、転換点となる出来事を時間軸に沿って並べた。また、娘から語られた内容をもとに、進路選択や将来設計における分岐点と等至点に注目して、経験や出来事を時間軸に沿って並べた。さらに、母親と娘の人生径路における種々の影響力を図の上下に矢印で加えた。

図の最下部にある横軸は非可逆的時間(Irreversible Time)の流れを示している。だれにとっても時間の流れは必然であり、そこに経験が位置付けられる。また、縦軸は、個人が志向している方向であり、本研究では上方向が母と娘の社会的自己実現の達成を表している。分岐点(Bifurcation Point; BFP)は、人生における分岐であり、いくつかの選択肢の間で葛藤を感じている地点である。等至点(Equifinality Point; EFP)または両極化した等至点(Polarized-Equifinality Point; P-EFP)は分岐したものがいったん収束する地点である。さらにTEM図には通常、好むと好まざるとにかかわらず個人の経験が生じる地点である必須通過点(Obligatory Passage Point; OPP)も表示するが、本研究のTEM図では省略している。TEM図には周りからの影響を書き加えることができ、ある方向を志向した個人の経験に促進的に作用する事象や働きかけを社会的ガイド(Social Guidance; SG)として上向きの矢印で表し、逆に抑制的なものを社会的方向づけ(Social Direction; SD)として下向きの矢印で表した。

トランスビュー

作成されたTEM図について協力者のもとに持参し、話し合いの時間をもった。その結果、TEM図に必要な修正を加えた。この手続きは、トランスビューと呼ばれる。荒川・安田・サ

トウ (2012) は、インタビュー (Inter-view) は語り手と聴き手の間 (inter) で、ものの見方や視点 (view) が拡張される営みであるが、TEM 図を介して語り手と聴き手の視点の「融合」がなされる有り様はトランスビュー (Trans-view) と言えると述べている。

結果と考察

図3～図5は、それぞれA～Cの母娘のTEM図である。娘が高校進学前後から将来にかけて経験した(するであろう)事象(実線の四角形)を時間軸に沿って並べ、それに母親の主な経験(点線の四角形)を加えたものである。実線の矢印は娘への影響、点線の矢印は母親への影響を表している。それぞれの図について以下に説明する。

Aさん母娘のケース

母親はフェミニズムとはやや距離をとりつつも、自らの意思で社会的自己実現を目指していた。子育てサークルから始まった社会的活動は、研究所の設立、大学で教えることへとつながっていった。それぞれが分岐点であった可能性もあるが、この母親には自己実現という大きな方向性があったために、迷いや葛藤は少なかったようである。よってTEM図でも分岐点にはしなかった。しかし、ある程度の目標が達成され、人生の折り返し地点を迎えた今、娘が自立する寂しさと新たな選択と向き合っており、これは大きな分岐点だと言える。

娘は自由な家庭環境で育ち、幼い頃から外国文化に触れ、両親と兄の影響で音楽やボランティア活動にも関心を強めていった。高校進学や大学進学において岐路に立たされるが、自主的な選択にまかされていた。とりわけ外国や外国語への興味が強く、それぞれの選択を方向付ける動因になっていた。学業以外に、ボランティア活動や趣味の活動、アルバイトを行ったことも、自由と自立が促進され、将来の職業に結び付いていったことがわかる。家族と経験をともにすることが多かったが、とくに母親とは親しく、母親が身近なロールモデルとなり、男女平等意識が自然と身につけている。

娘は多くの分岐点に遭遇するが、そのつど自己実現をめざす母親の生き方が、自分で何かを決めるといふ娘の選択のスタイルに影響を与えたと言えるだろう。娘が現在直面している職業選択は柔軟性があり両極化した等至点となっている。TEM図でもわかるように、娘の自己実現に対してSGが多く、SDは見られない。

Bさん母娘のケース

母親はもともと英語が好きで英文科から博士課程まで進み、当初は研究者をめざした。同時に女性学へも関心があった。大学教員の職を得、外国語教育のマネジメントに携わったことから留学生教育への関心が強くなった。そこで、外国の大学院に入学しなおして日本語教師の資格を取得し、現在、日本語教師として海外で働いている。母親の家族に対する思い

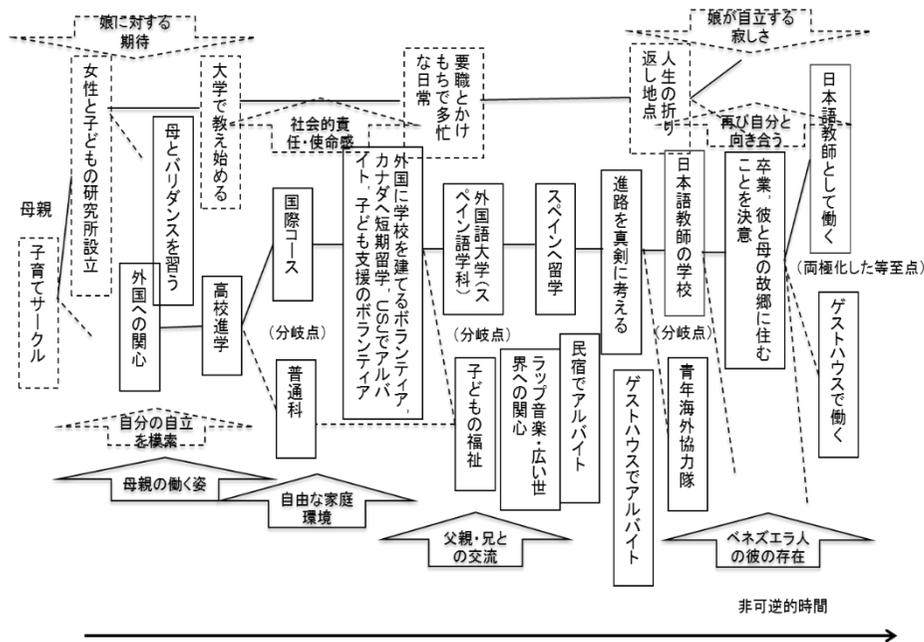


図3 Aさん母娘のTEM図

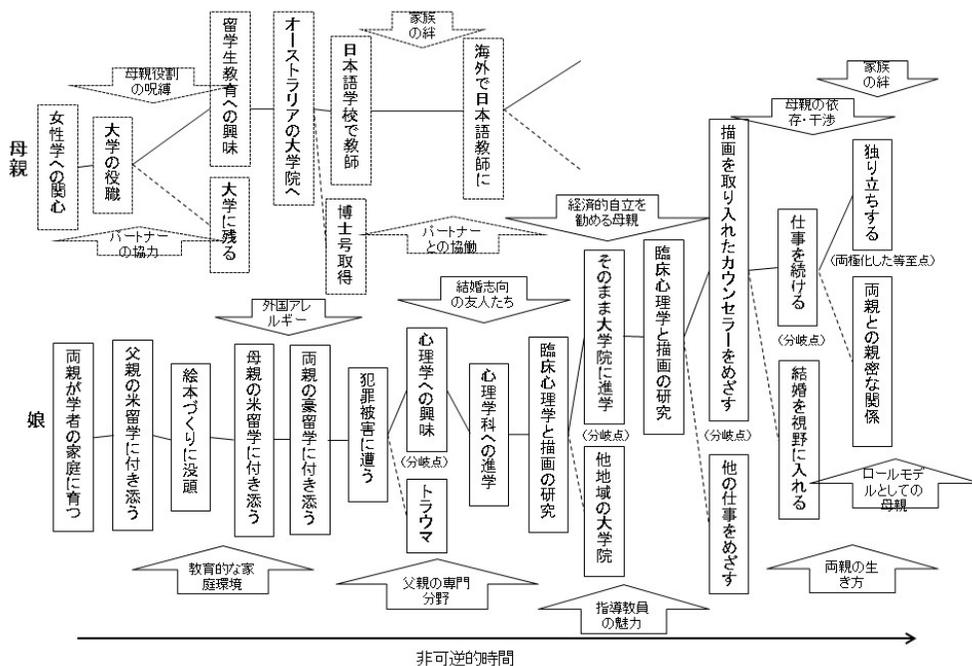


図4 Bさん母娘のTEM図

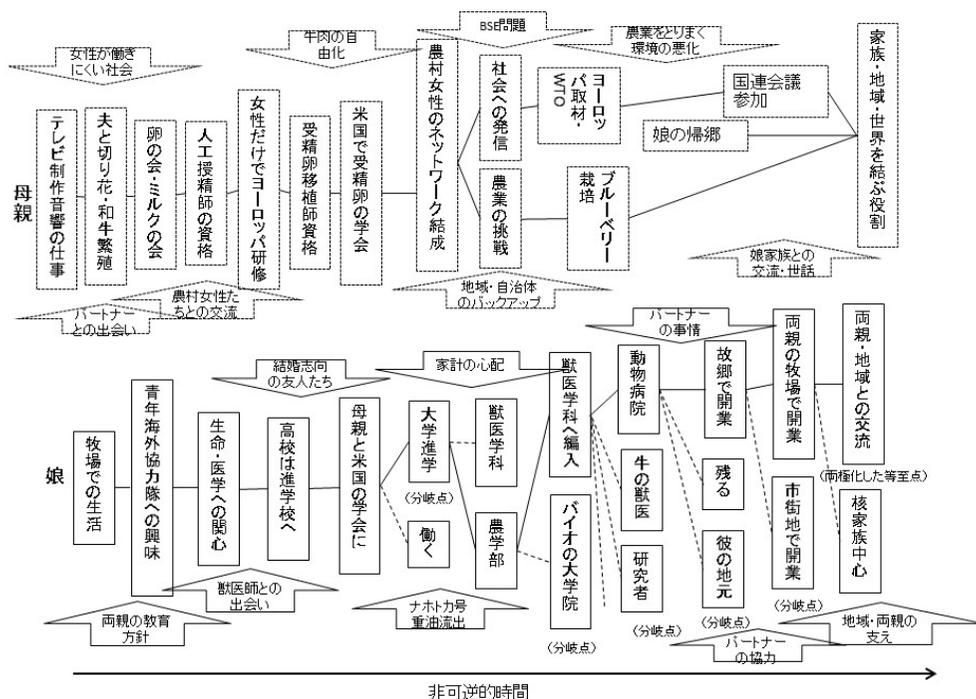


図5 Cさん母娘のTEM図

は、自身の選択を狭めたわけではなく、パートナーとの協働により、外国との行き来を伴うが自由度と創造性の高い仕事に向かわせたと言える。

両親が学者の家庭で育った娘は、父親と母親の数度の留学に付き添ったが、この経験はむしろ日本や生家への愛着をもたらした。両親は交互に娘の世話をし、教育的な環境を与えていた。犯罪被害にあったことはトラウマより心理学への興味を強め、心理学科に進学することになる。さらにより専門的な学びを求めて大学院に進学し、描画を取り入れたカウンセリングを仕事にしたいと考えている。結婚で仕事を犠牲にする考えはなく、そこにロールモデル・ロールモデルとしての両親の影響が推測される。

母親Aさんとは異なり、この母親は、娘にむしろ「別の(普通の)」生き方を勧めている面もある。地元に残って大学院に進むのとは別の、経済的自立の道もあること、生涯独身を貫くのと別の、良い相手を見つけるという道もあることを勧めている。これは母親自身の生き方と矛盾するようだが、人生にはいろいろな選択肢があることを教えているのかもしれない。

Cさん母娘のケース

母親は、大学卒業後、音響関係の仕事に就いたが、女性が働きにくい社会に幻滅し、夫とともに牧場経営に乗り出した。花の栽培、和牛の繁殖などで生計を立て、子育て、女性だけのヨーロッパ研修の企画、農村女性のネットワークづくりに奔走した。牛肉の自由化やBSE問題などに当事者としてかわり、外国への取材調査、社会的な発言や活動を行ってきた。最近では、孫の世話やブルーベリーの栽培という新たな仕事も加わり、NPOの代表を退いて、若い母親グループとの平和学習など、地域に密着しながら、国連の会議に参加するなど、活動の幅を広げている。母親が自らの自立と活動を行ってきたこと背景には、次世代の子どもたちに平和な社会と自然を残したいという気持ちがあったと考えられ、社会的活動と子育ては同じ地平にある出来事だったと言える。

牧場で育った娘は、生命と医学への関心を育み、生きることの基本を身につけた。高校時代に母親と米国の学会に参加し、女性が社会で活躍することの意義を実感、家計を心配しつつも獣医学科に進学したいと考えるようになった。獣医学科の受験に失敗し浪人後農学部に進学、卒業後、大学院進学的气持ちはあったが獣医学科への編入学を果たした。当時BSE問題が起り、牛の獣医ではなく動物病院の獣医になった。その後開業することを決意するが、パートナーの理解があり、両親の牧場に動物病院を併設することができた。今、家族の絆を大切に、地域から信頼される獣医をめざしている。娘の語りからは、母親を尊敬しつつ客観視もしている様子が伺われた。それは、すでに娘が名実とともに自立し、母親と対等にかかわれる一人の女性となっているからであろう。

フェミニスト母娘の普遍性

本研究に協力していただいた3名の母親は、インタビュー当時において52歳から66歳までと年齢差があるが、いずれも、第二波フェミニズムの影響を少なからず受けている人たちである。期せずして3名ともが自らをフェミニストと自称していなかったが、フェミニズムに共感的であり、男性に依存せず、自分自身の人生を自分で決めてきたという点で「フェミニスト的」である。また、女性の自立や解放をめざす活動への関心は強い。Aさんは子育てサークルを主宰、Bさんは女性学関係の雑誌の編集に参加、Cさんは女性のネットワークづくりをリードしてきた。このように、女性の視点で社会変革をめざしてきたという点では「フェミニスト的」というより「フェミニスト」である。一方、その娘たちも、男性に依存せず、経済的自立をめざし、他の女性のため、社会のために何かやろうとしている点で「フェミニスト的」な生き方を志向していると言えるだろう。

母親と娘の男女平等観（何をもちて男女平等というかについての見解）には関連があるという研究結果もあるが（青野・澤田・宇井・滑田，2015），母親がフェミニストであるからと言って必ずしも娘がフェミニストになるとは限らないということは多くの研究で指摘されている（コール・ズッカー・ダンカン，2004）。では、本研究の協力者である、この母親たちと娘たちをつなぐものはいったい何なのだろうか。3組の母娘に共通した何かの関係して

いるのだろうか。

母親がフェミニストであるがゆえに娘への期待は強いものと予測されたが、3名の母親からそれは感じられなかった。娘への期待は自らへの課題ととらえなおす母親の姿は、Aさんが娘を出産したときに娘に願った「自立はむしろ自らの課題だった」と語られたエピソードからも理解される。フェミニストの母親は、娘にフェミニストであれと期待するわけでもなく、フェミニストとしての考え方を直接伝えるわけでもない。むしろ、自らの生きざまを見せることで娘に影響を与えているのではないか。

この3名の母親たちは、フェミニズムを直接教えることはなかったが、母親たちは身をもって人生の価値というものを教えたのではないだろうか。Aさんの場合であれば女性がつながることの大切さである。Bさんの場合であれば、女性が世界に出ていくことの大切さである。Cさんの場合であれば、人間と自然との共生の大切さである。このことも、口で教えるのではなく、自らの行動を通して娘たちに伝えられているのではないだろうか。母親たちがこういった人生の価値を追求する姿勢は、娘たちに人生の目標を見つけやすくさせると考えられる。それは母親と共通したものかもしれないし、そうでないかもしれないが。

母親たちは、自分の目標を追求するなかで、自立した女性のモデルを娘に示してきたと言えるだろう。それは、自分は自分、娘は娘というスタンスを示すことでもある。母親が娘の主体性を尊重したことは、娘の選択の幅を広げると同時に、娘がある一つの方向性をもって選択を推し進めることになったのではないだろうか。娘Aさんは、将来の目標が明確だからこそ多くの分岐点に遭遇し、そのつど悩みながらも納得のゆく選択をしているように思われる。娘BさんはTEM図ではやや平坦な人生径路を歩んでいるように見えるが、海外でも活躍する母親を尊敬しながらも、自らは地に足をつけた母とは異なる道を選択してきている。娘Cさんも娘Aさん同様、明確な目標をもち、その都度考え抜いた選択を行ってきたように見える。

最後に、青野(印刷中)も含めて、男女平等意識の継承についての知見をまとめると、次の3点にまとめられる。①フェミニストの母親はフェミニズムを直接娘に教えているわけではない。②そうではなくて、人生の価値を教えているのである。③母親は人生の選択には終わりが無いことを身をもって教えている。また、この研究のもう一つの成果として、TEM図とトランスビューが非常に有効であったことを指摘しておきたい。協力者たちに人生を改めて振り返る機会を与え、研究者には聞き取った内容を確認する機会を与えてくれたと同時に、母・娘の双方が、近いようだが意外と知られていない母・娘の側面をお互いを知ることができ、重ね合わせることができた点である。

ただ、この研究には限界がある。それは、TEM図で2人の人生径路を関連付けることの難しさである。相互の影響過程についてのより詳細なインタビューを行う必要があるだろう。また、スノーボールサンプリングによる限界である。本研究の参加者はたまたま良好な母親

関係にある人たちだったと言えるかもしれない。より多くの多様な参加者（統制群の設定を含む）を得て、男女平等意識の継承という問題を検討する必要がある。

引用文献

- 青野篤子 (2014) . 男女平等意識の世代間継承性——Yahoo! 知恵袋の分析から——周玉慧 (編) 現代日本社会の心理と感情 台湾: 中央研究院 pp.173-202.
- 青野篤子 (2014) . 多世代交流型女子会の実践的研究 日本学研究, 5, 1-9.
- 青野篤子 (2015) . 男女平等意識の継承性——娘の語りを通して—— 福山大学こころの健康相談室紀要, 9, 1-9.
- 青野篤子 (2015) . 男女平等意識の継承—フェミニストを母にもつ娘の人生径路—日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 1276.
- 青野篤子・澤田忠幸・宇井美代子・滑田明暢 (2015) . 母親から娘への男女平等の継承 日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 1275.
- 青野篤子 (印刷中) . 男女平等意識の継承性——母と娘の語りを通して—— 福山大学こころの健康相談室紀要, 10.
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) . 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- コール,E.R・ズッカー,A.N.・ダンカン,L.E. Tin Tin Htun (訳) (2004) . 変わりゆく社会, 変わりゆく女性 (男性) R.K.アンガー (編著) 森永康子・青野篤子・福富護 (監訳) 女性とジェンダーの心理学ハンドブック 北大路書房 pp.486-501. (Cole, E.R., Zucker, A.N., & Duncan, L.E. Changing society, changing women (and men) In R.K. Unger (Ed.) (2001) . *Handbook of the psychology of women and gender*. John Wiley & Sons.)
- Duncan, L.E. (2010) . Women's relationship to feminism: Effects of generation and feminist self-labeling. *Psychology of Women Quarterly*, 34, 498-507.
- 水田宗子 (1996) . 母と娘をめぐるフェミニズムの現在 水田宗子・北田幸恵・長谷川啓 (編著) 母と娘のフェミニズム——近代家族を超えて—— 田畑出版 pp.7-20.
- 野村泰代 (1992) . 母—娘間の世代的伝達の問題点について 福岡教育大学紀要, 41, 45-53.
- 渋谷晴子 (2008) . 「第三世代」フェミニストとリブとの距離は何か 女性学年報, 29, 45-69.
- 安田裕子・サトウタツヤ (編著) (2012) . TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開 誠信書房

Zucker,A.N.& Stewart, A.J. (2007) . Growing up and growing older: Feminism as a context for women's lives *Psychology of Women Quarterly*, 31, 137-145.

¹本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金補助金）（基盤研究（C））（課題番号：25380863 研究代表者：青野篤子）の助成を受けた。また、一部は、日本心理学会第79回大会において発表された。

The succession of egalitarian gender-role attitude: From feminist mothers to their daughters

Atsuko Aono

Feminism has gradually changed since the second wave of feminism and presently we have entered into the post-feminism era. Also, various measures show the continuous low rank of gender equality in Japan. Couldn't the previous (mother) generation pass on egalitarian genderrole attitudes to the present (daughter) generation? And what promotes or inhibits it? To provide answers to these questions, this study examined how mother's life affected daughter's life plan, focusing on feminist mothers and their daughters. I interviewed three mothers and daughters separately, and analyzed the promoting or inhibiting factors according to TEM (Trajectory Equifinality Model). The result showed that feminist mothers have not taught feminism directly, but they taught life values and life choices through their own life instead. Further, some problems to be challenged are indicated in this article.

【Key words: egalitarian attitude, succession, feminist, mother, daughter】